

第2号 『ことば遊び』

同窓会会報 別冊

あれこれ

大東文化大学同窓会

ご意見ご質問がございましたら

大東文化大学同窓会事務局

E-mail dbdousou.gmail.com



<https://www.dbdousou.com/>

第二回「ことば遊び」

遊びは、明日美・明日備から出来た言葉です。

明日美は明日を美しくする。

教養を脱したものが趣味となり、趣味をだっしたものが遊びになる。

明日備は明日に備える。

知恵比べや言葉遊び。頭を柔軟にさせる遊び。

今日は小晰から入ります。ことば遊び。そして、比較ばなし「うば捨て山」「しびと転ばし」。
ご縁文化、雑学「つまらないものですが」は決して言わない。小晰と続きますが、
新たに矢崎節夫と読む「金子みすゞ童話集」みすゞさんの美しい言葉から感じるものは何かを楽しんでください。

「小晰・とんち話です」

冷や

ある男、とてもよい酒をもらいまして、じゃあ、なんてんで、お爛をしまして、さあ飲むとうとう時に目がさめて。男「ああ、こんなことなら、冷やで飲んどきゃよかった。」

1

匂いの返し(大岡裁きとも言われています。別話としてウナギの話もあります)

ある所に、お金持ちの男と貧乏な男が隣同士に住んでいました。

お金持ちの男はいつも豪華な食事をしていて、貧乏な男は白ごはんに梅干一つという貧しい生活でした。お金持ちの男は、とんでもないケチでお金の執着が強い男だった。

ある日、お金持ちの男が鯛を焼いたら、隣の貧乏の男が鯛の美味しい匂いを嗅ぎながら「ご飯を食べようとしていた。お金持ちの男は、匂いを嗅いだから「お金を払え」と言い出した。

結局、奉行の裁きの前でお金を払うことになった。貧乏な男は、巾着に手を入れて『チャリチャリ』とお金の音だけを聴かせて、形のない匂いには形のない音で支払いました。お金があっても知恵には勝てないというお話でした。

日本昔ばなし(鳥取県)

2

●ことば遊び

一つの言葉を二度三度と使ってみました。

・講の最中(さいちゆう)に「お菓子まわしの儀式」があり最中(もなか)を食べた。

・上手(かみて)に座る人は、しゃべりなれているせいか、話しが上手(じょうず)ですね。君も上手だけれど、彼のほうが上手(うわて)をいくね。

・僕(ぼく)は、彼女の僕(しもべ)です。

・今回の人事(じんじ)は、本当に正しい評価がされているのかな、どうだろう。まるで興味がなく人事(ひとごと)のようだね。

豊は聞きました。おじいさんは言いました。（おはぎ・秋の七草）

『昔はお彼岸（春分の日・秋分の日）に食べていた「ぼたもち」と「おはぎ」は、仏事にはなくてはならない定番だったが、そこから進化して、御菓子司に毎日並ぶようになったな。美味しくて爺は好きだけだな。ちよつと情緒が無くなってきたな。今は、おはぎという言葉が主流になったな。』

豊さんよ、ぼたもちとおはぎの違いを知っているかな。ぼたもちは、牡丹の花が咲く春にちなんですよのじゃ。おはぎは、秋の七草、御萩にちなんと呼ぶのじゃ。作り方は違ったが、だんだん同じものようになってきたな。でも、店によっては昔のまんまだったり、工夫して時代に会うように作っているな。今は、一年中たべられるな。だから、夏、冬と呼び名が無いと不公平じゃな。あるんじゃ、夏には「夜舟」冬には「北窓」と呼ぶのじゃ。

夜舟、北窓とはどういう意味か分かるかな。ぼたもちと言っても、もちはずかぬいよね。それで、夜、作ってもぺったんという音がしないので気付かないので「搗き知らず」。それを他の表現をと考え、夜、暗くて舟が着いたことが分からない事にかけて「着き知らず」と。北窓は、北側の窓だと月が見えない事から「月知らず」と言葉遊びをしたそうじゃ。

このような風雅な名前をつける江戸人の想像力とその機知こそ決してなくしてはならないと思うよ。

3

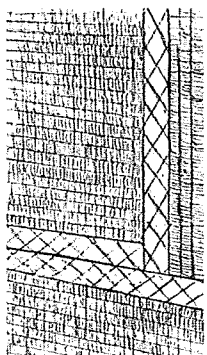
そうそう、せっかく牡丹の言葉が出たので、牡丹の花にちなんでも話をしよう。4

牡丹の花言葉に、恥じらい・思いやり・風格・富貴などがあるんだよ。すてきな花言葉だね。他に牡丹と言えば有名な言葉があるのを知っているかい。美しさじゃ。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」牡丹は枝分かれした横向きの枝に花をつけるんだよ。その姿は美しい女性がすわっているようであることから言われそうだよ。

ちなみに、芍薬は茎の先端に花を咲かせその姿が立っているように見えるから。ユリは風に揺れる様が歩いている美しさに見える事から言われたそうじゃ。

萩の説明がたらなかったな。萩の花言葉は、内気、柔らかな心、前向きな恋などがあるのじゃ。花を見ると分かるような気がするのう。』

豊は、いい話を聞いたな。おじいさんもたまにはおしゃれな話もするんだ。とほめました。



比較昔ばなし

「姨捨山」「しびと転ばし」この二つの話しは、六十歳になり人減らしの為に捨てられていた国の話しです。それぞれ題名は違いますが、内容は一緒です。地域によってこんな違う話になっている事を楽しんでください。私は、題名の同じものや内容の似ている昔ばなしを「比較昔話」と呼んでいます。読み比べる事で、地域や人の考え方・とらえかたの面白さに気付くと思います。少し長いですが、読んでください。

姨捨山（おばすてやま）

むかしがたり（長野県千曲市）

むかしむかし、信州にひとりの殿さまがいました。この殿さまは、なぜかお年寄りが大嫌い。ただ嫌いなだけなら、まだ良かったのですが、仕舞には国中に「六十歳を過ぎた年寄りには山に捨てるべし」という、とんでもないお触れを出すほどだったのです。

国の民は皆、弱ってしまいました。しかし殿さまのお触れに逆らうことはできません。六十になったら山に行くしかない：皆そうやって諦めてしまいました。

ある村に母と息子が住んでいました。母の年は六十になり、息子はお触れに従って山に母を捨てに行かねばなりません。

息子は母を背中にしよって、山の中に入って行きました。大切な親を捨てなければならぬ悲しさから、息子は何も言わず、どんどん山の奥に進んでいきます。

5

背中にしよわれた母もまた無言のままでした。しかしなぜか不思議なことに、母は時々、木の枝をポキッと折って、道の上に一本ずつ捨てているのでした。何のためにそんなことをしているのか、息子は首をひねりましたが、何も問わずに黙々と山道を歩き続けました。どれほど歩いたことでしょうか。見たこともない山の奥のまた奥まで来ました。辺りは日も暮れかけています。息子は母を背中から下ろすと、ひとことふたこと言葉を交わして、その場から立ち去りました。ひとり残された母は、何も言わず、離れて行く息子をただじっと見つめるだけでした。

6

ところが。あまりにも山の奥まで来てしまったせいで、息子は帰り道が分からなくなってしまう。あちこちをうろろしてみたものの、ますます迷うばかりです。結局息子は、残された母の居る場所に再び戻って来たのでした。

戻って来た息子の姿を見た母は、静かにこう言いました。「こんなこともあるかと思うて、木の枝を道に落としてきたんじや。枝を道しるべにして辿（たど）れば、麓に帰れるじやろ。気をつけてお帰り」

捨てられる身でありながら、それでも息子を思う親心に心を打たれた息子は、母を捨てるのをやめ、一緒に家に帰りました。これは殿さまのお触れに逆らうことになりました。息子はそれでも良いと思ったのです。

それからしばらく経ったある日のこと。隣の国から殿さまのところへ、使者がやって来ました。使者は隣の国の殿さまからの手紙を持っていました。

その手紙には「灰で縄をなつて、持って参れ。できなくば、攻め入って滅ぼしてくれよう」と書かれていました。

殿さまは困つてしまいました。灰で縄をなうなんて、できるはずがありません。家来もただただ、首をひねるばかりです。

仕方なく殿さまは、灰で縄をなうことができる者がいたら城に来るようにと、お触れを出しました。

お触れを聞いた息子は家に戻り、母に話して聞かせました。

すると母は平然とした顔で、
「濃い塩水に藁を浸してから、その藁で縄をなうとええ。あとは焼いてしまえば、縄の形のままで灰になるじやろ」と答えたのです。

息子が早速試してみると、見事に灰の縄ができました。灰を崩さないようにそつと持ち上げて、城へ持つて行くと、殿さまは大喜び。

しかしまたもや隣の国が使者を送つて来たのです。今度の手紙には「この玉に糸を通せ」とあり、玉には穴が開いていました。しかし穴はまっすぐに開いているのではなく、中にくねくねと曲がついていたのです。これではつかえてしまつて、糸が通りません。

再び息子が母に尋ねると、母は落ち着いて答えました。

「片方の穴の入口に蜂蜜を塗るじやろ。それで蟻の足に細い糸を結んでな、反対の穴から入れてやればええ」

これも息子が試してみたところ、大成功。

しかししかし、二度ある事は三度ある。またまた隣の国が、今度は「叩かなくても音が鳴る太鼓を作れ」と言つてきたのです。

これもまた母が、

「アブを何匹か捕まえて来て、太鼓の中に入れておけばええ」と簡単に答え、息子が試してみると、確かに叩かなくても勝手に音が鳴る太鼓になりました。

8

この太鼓を見て、殿さまは大喜びです。無理難題を三度も解決するほどの智慧がある国に攻め入つても、勝ち目はないと判断した隣の国の殿さまは、それ以降、無理を言つて来る事がなくなりました。

息子は殿さまに大いに褒められ、ご褒美をもらえることになりました。しかし息子は褒美は要らないと言います。これら三つの難題を解決したのは、六十を過ぎた母でした。母を

山に捨てないで良いようにしてくれと頼んだのです。殿さまは大いに感心しました。お年寄りを大切にしなければならぬと気付いた殿さまは、お年寄りを山に捨てろというお触れを取りやめたのです。

こうして国の民は、安心してお年寄りと暮らすことができるようになったのだそう

しびと転ばし(しびところばし)

里美むかしむかし(茨城県)

篠手(しのて)から東へ路をたどると十町黒坂に出ますが、その路の峠を鬼越えといいますが、その北側は急傾斜で、大きな石がごろごろと露(あら)われ、足でも滑らせたら深い谷底までも転げ落ちそうな恐ろしいところです。ここを地元の人々は「死人(しびと)転ばし」と呼んでいます。

むかし、毎年不作続きで年貢が納められませんでした。怒つた殿様は、村に無理難題を持ちかけました。

7

「これが出来なければ村長（むらおき）を打ち首だぞ」と言つて来たのです。その難題というのは、「灰で縄をもじつて来い」ということです。

息を吹きかければ、吹き飛んでしまうようなあの灰で縄を作れる訳がない。よい知恵が浮かびません。ほとほと困り果てているところへ、一人の若い男が進み出てきました。

「もし私でよければ何とか考えましょう。五日の時間を下さい」といいました。

「もし出来なかつた時は、私が打ち首になります」

五日目の朝、男は板の上に乗せた灰の縄を持ってきました。なるほど間違ひなく縄です。早々にその縄を持つてお城に出かけました。

殿様はあまりにも早く、灰の縄を作つて来たので「うむつ」と唸（うな）つたが、良く出来たとも言えず次の難題を持ちかけてきました。

「縄が出来る位ならわらじだつて出来るだろう。作つて参れ」と言いました。

またまた困つた村長は若者に、「今度はわらじを作つてくれないか」と頼みました。

若者は、早々にわらじを作り村長と共に参上し、「これこの通り出来上がりました」と差し出しました。

さすがの殿様も今度も唸（うな）りながら、「良く出来た」と言つてくれました。

そして、殿様は、「この作り方を是非教えてくれ」と言いました。しかし若者はなかなか口を割りません。あまり熱心に聞くので、男は今後このような無理難題を決して出さないと言う約束で、明かすことになりました。

「実は、私には今年七十になる母親がおります。お殿様は六十才になると不用品として山に捨てるようにとのお触れを出しています。しかし、私には何としても、長い歲月苦勞をして私を育ててくれた大切な母ですから、そのような惨（むご）いことは出来ません。」

よくよく考えた末に、床下に穴を掘り、その中に母を隠しました。何か困つたことが出来ました時は床下の母に相談をして、知恵を借りました。縄もわらじも母に相談しましたところ、まず縄をもじり乾いたら淡い塩水に浸（ひた）し、陽（ひ）に干し、乾いたら板の上に乗せて、燃やせば形が崩れることもなく、灰の縄が出来上がると教えられました。わらじも同じです。掟（おきて）に背（そむ）いて申し訳ありませんでした」と申しました。

さすがの殿様も、「わしが悪かつた。長い歲月苦勞してきた親を、不用品になつたとして山谷（さんやま）などに捨てさせることは、誠に無残な事だつた。この間違つている掟はすぐにとり止めて、親を大切にするようにとお触れを出すことにしよう」と言われ、若者に「ご褒美を下さいました。」

それから「しびと転ばし」へ年老いた親を連れて行く人はいなくなつたということでした。

老いる・老入りと言う言葉があります。

「老いる」は、ただ何となく年をとること。

「老入り」（おいり）隠居して若い人を育て引き立てる役目のことをいいました。

隠居後、年長者ならではの見識を期待されました。人生五十年の時代、四十歳をすぎると、そろそろ世代交代の準備に入るのが江戸の習わしでした。

周りを笑わせるユーモア精神を持ち、若い人を引き立てることが老入り後のつとめでした。隠居後は我が家、あるいは地域の相談役に徹しました。周りの者も、そうした価値を認め、尊敬の念で接しました。

日本はご縁文化

さりげなく使う言葉に、縁があります。

縁があった、なかったで片づける事はありませんか。

凄くだいたいな言葉なのに割り切れる不思議な言葉ですね。

私は縁があって、「あれこれ」を作りました。

同窓会に入会しなければ、「あれこれ」を出せていません。自分の学んできたことを少しでも、お伝えし、皆さまのこれから役に立たないだろうかとの思いだけです。

この小冊子を手にとり、読まれたあなたに何かを感じ取って頂き、将来へのヒントになれば、それは良いご縁です。何もなければご縁がなかったことになります。

言葉で簡単に縁の話しをしますが、人は必ず忘れられない縁で人生を送っています。

良い縁と悪い縁。どのような縁が出来るかは、人それぞれの努力です。良い縁は伸ばしましょう。悪い縁は速く立ち切り良い縁を見つけましょう。

「袖振り合うも多少の縁」という言葉もあります。これこそご縁文化ですね。ちよつとした縁でも大切に作る日本人の心を表しています。

「一期一会」の考え方（一生に一度の出会い）茶道の心得ですから、外国の人が日本に来て初めてあったのに、凄く親切にしていた

ご恩は一生忘れません。このような言葉が聞かれると言う事は、すばらしい日本人のご縁文化です。

11

日本人は和を尊ぶ、助け合いの文化

12

「和の心と輪の行動」が出来る人達

「和」は平和を望むころ、**「輪」**は手をつなぎ、共に生きる行動する人達「ありがとう」
「和」は平和を望むころ、**「輪」**は手をつなぎ、共に生きる行動する人達「ありがとう」
ざいます」「どういたしまして、おたがいさまです」とでる言葉は何と素敵な言葉でしよ
う。「おはようございます」「こんにちば」「こんばんは」と挨拶すれば、自然とこだま
のように「おはようございます」「こんにちば」「こんばんは」と返って来る気持ちのい
い返事。

旅から帰って、楽しい思い出のお福分け、料理を少し多めに作ったからと言って、もつて来て頂けるおすそ分け、隣人を大事にする生活の輪、もっていないものなどの貸し借り、もつたいない精神で、むだにしない生活の知恵。

先人が築き上げた日本人の助け合いの文化を大事にしたいなと思います。

「雑学」

江戸美人の条件

容姿よりも器量よし（容姿は見かけ、器量は人間の器を示す言葉）

生まれつきの容姿ではなく、自分の努力で身に着いたしぐさ。

気配り美人で、「目つき」「表情」「ものの言い方」「身のこなし」を評価する教養の高さが江戸人にはありました。

どんな人にも対応できる上手なあいづちは、人間関係を円滑にするし、これが江戸美人の条件でした。

ツルツル食べるもの

おそばは、ツルツル食べるもので、サーツと音をたてたべるものではありません。落語で「そば」を食べる表現から音を立てるようになったのではないかと言われています。そんなバカなと言われる人に、なぜ、音を立てて食べるようになったのかその歴史、理由を聞いてみてください。

神明女（しめじよ）「江戸の娘」

江戸のまちで成功するには、江戸人の娘を嫁にすることだともいわれていました。「しめ（神明）さんなら、なくても（いい材料で）味をつけるぞ。かっぺい（井中っぺい）はうまいものを、まづくして食わせるぞ」（聡明な女は料理がうまいという江戸版です）と江戸の古老がよく言ったそうです。

江戸人の女性には、無から有を生じさせる生活の知恵を持った神明女だったようです。切れる包丁の使い方、切れない包丁しかないときの使い方、付焼刃の使い方、いきのいい魚の切り方、古い葉っぱの切り方、柿の皮の剥き方、しら髭をつくるときの包丁の研ぎ方、荒砥（あらど）しかなかったときの仕上げの研ぎ方というような具体的でしかも応用のきく基本の手ほどきを教えたのです。

13

例えば、母娘二人しかないとき手っ取り早く汁ものをつくるには、椎茸を切らした時の味の付け方、乳離れしたばかりの稚児に与える汁ものの作り方、多数の客人に早く味のいい汁ものを出す要領というようにすべて、実地に役立つ教え方だったというのです。

14

江戸の町では、一事が万事、こんな薫陶（くんとう）を受けた女性を妻にもてば、夫の成功は疑いなしと自信を持って言えたのでしよう。しかも江戸料理は夫婦でつくるのが原則だったそうです。寄合に出るのにも、片方に内緒ということはなかったようです。

カカア自慢

銭湯の男湯ではカカア自慢（料理の腕自慢・味のバリエーション・大根の日）の亭主がお互いに競い合い、その自慢の内容によって居場所がきまり、自慢気のない女房を持った亭主が良い場所にいるとどかさされたというから笑ってしまいます。（江戸っ子の遊び心とはソフトの競争だったそうです）。

とにかく女が、意外に大事にされた江戸の町といわれていますが、女性もそれ相應の能力を持っていたのではないのでしょうか。そういう意味で江戸の町は民主的、男女同権であったともいえるようです。

つまらないものですが・・・は決して言わない

人に物を差し上げるとき、へりくだって言うあいさつ。

訪問する際に手土産を持参するのは常識。その際、「よろしかったらどうぞ・・・」ということで、控えめに言いました。

江戸には全国各地から珍しいものが集まってきました。地方よりも品揃え豊富で情報も多い。その江戸に住んでいるあなたには満足いかないものかもしれないが、あなたのために用意したので受け取ってほしい、こんな気遣いが背景にあつて出た言葉なのです。

芝三光の江戸しぐさ

小噺比較昔ばなし

短くて面白い話です。五話載せました。

木にかけないで竹にかける

続立川むかし話

酒飲みなんかがあると、みんな大酒飲みで、人の気になるようなことでも、なんでもしやべり、それをまた、気にする人もいて、大変だった。そんな時、あるトンチのきくじいさんが、こんなことをいったと。

「人間はね、人の言うことを気にかけるからいけねえ。竹にかけりゃ、木にかからねえ」

15

勘作話

細長のお魚の話

日本昔ばなし(長崎県)

16

ある日、珍しい魚を見たお殿様が、勘作に魚の名前を尋ねました。

勘作はちよつと考えて「キンキラキン」と答えましたが、後日、干し魚になった魚を見て「チンチラチン」と答えました。最初の名前と違うので殿様は腹を立てましたが、勘作は「イカも干せばスルメと名前が変わりますたい」とトンチでその場を収めました。

琴姫物語

鳴き砂の由来譚

日本昔ばなし(島根県)

平家の姫が流されてきた。村人たちの介抱で姫は元気を取り戻し、やがて浜で琴を弾くまてになった。だが、姫は再び病に倒れ、介抱むなくそのまま亡くなってしまった。それから後、不思議なことに浜の砂が鳴くようになった。それでその浜を琴ヶ浜と呼ぶようになった、というもので鳴き砂の由来譚です。

駿河と甲斐の争い

続立川むかし話

駿河国と甲斐国で、富士山のとりあいつこをしたらば、蜀山人は、次のような歌を詠んで、けりをつけたという。

「すそのから まくりあげたる おふじさん かいでみるより するがだいいち」

江戸自慢

続立川のむかし話

江戸っ子が、奈良見物に出かけて行った時の事、「奈良の大仏、大仏つてみんなが、よくいうけれど、よくよく聞いてみたら、五丈八尺しかないんだって。

関東へ来てみる。小仏だって三里ある。大菩薩なら十里ある」っていったとか。

『金子みすゞ』

『赤い鳥』、『金の船』、『童話』などの童話童謡雑誌が次々と創刊され、隆盛を極めていた大正時代末期。そのなかで彗星のごとく現れ、ひとときわ光を放っていたのが童謡詩人・金子みすゞです。

17

金子みすゞ（本名テル）は、明治36年大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）に生まれましました。成績は優秀、おとなしく、読書が好きでだれにでも優しい人であったといひます。

18

そんな彼女が童謡を書き始めたのは、20歳の頃からでした。4つの雑誌に投稿した作品が、そのすべてに掲載されるという鮮烈なデビューを飾ったみすゞは、『童話』の選者であった西條八十に「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されるなど、めざましい活躍をみせていきました。

ところが、その生涯は決して明るいものではありませんでした。23歳で結婚したものの、文学に理解のない夫から詩作を禁じられてしまい、さらには病氣、離婚と苦しみが続きました。ついには、前夫から最愛の娘を奪われなため自死の道を選び、26歳という若さでこの世を去ってしまいます。こうして彼女の残した作品は散逸し、いつしか幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなってしまうのです。

それから50余年。長い年月埋もれていたみすゞの作品は、児童文学者の矢崎節夫氏（現金子みすゞ記念館館長）の執念ともいえる熱意により再び世に送り出され、今では小学校「国語」全社の教科書に掲載されるようになりました。

天才童謡詩人、金子みすゞ。自然の風景をやさしく見つめ、優しさにつらぬかれた彼女の作品の数々は、②世紀を生きる私たちに大切なメッセージを伝え続けています。

矢崎節夫と読む金子みすゞ童謡

今回は「土」に関係するものを2編と最後のページに1編選びました。

『土』

矢崎節夫

こつつん、こつつん、
打(ぶ)たれる土は、
よい畑になって、
よい麦生むよ。

朝から晩まで、
踏まれる土は、
よい路になって
車をおすよ。

打たれぬ土は、

踏まれぬ土は、
要(い)らない土か。

いえいえ、それは、
名のない草の、
お宿をするよ。

『土と草』

母さん知らぬ
草の子を、
なん千万の
草の子を、
土はひとりで
育てます。

草があおあお
茂ったら、
土はかくれて
しまうのに。

「こつつん」のつんを、みなさんは下げて読みましたか。
上げて読みましたか。

下げて読んだ人は、土を打っている人の側に、上げて
読んだ人は、打たれる土の側に立って読んだ人です。

この作品の題は「土」ですから、どう読めばよいか、答えは
おのずと明らかです。打たれた土は痛いですから、つんと上
がるのですね。

これが人間なら、なおさらです。打たれた人は、いつまで
もいたいです。このことを忘れずに、人を打ったり、きず
つけたりしない人になりましょう。

19

「打たれる土は、／踏まれぬ土は、／要らない土か。

20

／いえいえ、それは、／名のない草の、／お宿をするよ。」

この世のなかに、だれ一人無用な人はいないので。
誰もがいるだけでいい、生まれただけで百点満点、と思え
て、うれしい気持ちになりますね。

草の子が母さんを知らないのは、草の子が芽を出したとき、
母さんである前の草は、もうかれているからです。かれて、
土になるのです。土は、たくさんの草の母さんの集まり、
大きいお母さんといってもいいでしょう。だから、何千万の

草の子を、選ぶことなく、豊かに育てるのです。そして、草
の子が大きく育つてしげると、土の母さんは見えなくなるの
です。お父さん、お母さんとみんなも、「土と草」なの
ですね。五年生の男の子が、この作品を読んで、「みすゞ
さんは、いっぱいの草と書かずに、(なん千万の)」と書いて
あります。ぼくは、草をひとまとまりと考えず、草の子一本
一本を大切に思うみすゞさんのやさしさを感じました。」と、
手紙をくれました。この事に気づいた男の子は素敵ですね。

今回は如何でしたか。浦島四草の「お爺さんのひとり言」と「金子みずゞ童謡」を入れました。

隠居になったおじいさんが、話し相手を求めて物、動物、草花、自然などに話しかけて楽しんで語っています。

昔の御隠居さんは、こうだったのかなと想像しながら、書いています。現在は、動けるままでは仕事をして下さいと言われ、老いた人間に、心身の安らぎが与えられない時代ですね。

江戸の老入るとは違いますね。

どちらがいいのか、これから自分に与えられた課題です。

若者の将来、老いた人の将来重みは違うかもしれませんが、頑張りましょう。

金子みずゞさんの詩はいかがでしたでしょうか。名前は知っているけど、詩はよく知らないという人が多いかもしれません。これを機会に、多くの詩を読んできたかと思えます。皆さんと同じくらいの歳につくったものです。皆さんも、みずゞさんの真似事でもいいから童謡詩に挑戦するのも素晴らしいことだと思います。

私は挑戦しましたけどダメでした。己を知ることが自分のプラスになりました。

また、次回を楽しみにしてください。あれこれ何でもあります。希望がありましたらお知らせください。

「あれこれ2号」制作 令和元年9月25日

ページが残りしました。もったいないので、みずゞさんの詩を一編。

『雲の子供』

風の子供のいるとこに、
波の子供はあそびます。

波の大人がいるとこにや
風も大人がいるのです。

だのに、お空を旅してる、
雲のこどもはかわいそう。

大人の風につれられて、
いきをきらしてついでゆく

「大人の風につれられて、／いきをきらしてついでゆく。」
あなたはおとなとして、おさない人の側から、自分自身を見たことがありますか。歩くとき、食べるとき、本を読むとき…それぞれに子供の速さがあるのに、親として、あなたはそれに気づいていますか、と、わたし自身が、つきつけられている作品です。
みずゞさんは、ほんとうの意味での、おとなです。

最後をお読みになられた方でしょうか。人とのお付き合いにも通じることです。そして、結婚して子供ができたとき思い出してください。